河村　悟（かわむら・さとる）

1、プロフィール

　詩人。八戸市に生まれて高校まで過ごす。「毛蟲の舞踏會」主宰。東京・福岡・京都等で生活を送りながら、写真・ドローイング・書・朗読・舞踏の演出等をしている。

＜生没＞

　1948（昭和 23）年 12 月 30 日　～　2023（令和 5）年 2 月 2 日

＜代表作＞

　詩集『スピリチュアル・タイクーンの為の舞踏メモ』（メルクリウス社）

　『聖なる病』（思潮社）、『夢の仇』（ノス出版）

　『黒衣の旅人』（書肆あむばるわりあ）

　『目覚めると雷鳴の巣のなかにいた』（ニ・ニ・セ・フィニ　カンパニー）

　句集『弥勒下生』（七月堂）

　「惑星の子どもたちの読本」（リベール社）

＜青森との関わり＞

　八戸市湊町に生まれる。八戸市立湊小・中、八戸北高校卒業。八戸での詩の朗読会（岸辺通信）にも参加。

2、作家解説

　1948（昭和 23）年 12 月 30 に八戸市湊町で生まれる。八戸市立湊小学校・湊中学校、青森県立八戸北高校を卒業後、1967（昭和 42）年 4 月に立教大学社会学部社会学科入学。立大全共闘の議長代行を務める。卒業後の 1972（昭和 47）年 4 月に広告制作会社アド・プランニング研究所入社。コピーライターを経て、作家活動に入る。

　1977（昭和 52）年に文芸誌『月の牙』を発刊。翌年に「ニューヨーク・アートディレクターズ・クラブ賞（出版部門）」を受賞。1984（昭和 59）年 8 月 1 日に詩集『スピリ

チュアル・タイクーンの為の舞踏メモ』(メルクリウス社)、1986(昭和 61)年 11 月 20 日に『聖なる病』(思潮社)、1994(平成 6)年 10 月に『夢ノ仇』(ノス出版)、同年にフランスの文芸誌『N. R. F』と『arpa』に詩が翻訳・掲載される。翌年 8 月 10 日に詩画集『毛深い砂漠を、横切ってー。』(高松衣緒里共作、未来工房)刊行。1998(平成 10)年 5 月、プラハにフランツ・カフカの足跡を訪ね、帰国後、アルトー・ヴェイユ・ベンヤミン・デュラス等を巡る思考実験をワークショップやセミナーで公開。2003(平成 15)年 1 月 1 日に『目覚めると雷鳴の巣のなかにいた』(ニ・ニ・セ・フィニ カンパニー)、2006(平成 18)年 10 月 21 日に『黒衣の旅人』(書肆あむばるわりあ)、2017(平成 29)年 9 月 8 日に句集『弥勒下生』(七月堂)を発行。

詩以外では、1993(平成 5)年 8 月 9 日に「惑星の子どもたちの読本」(リベール社)、2001(平成 13 年)5 月 20 日に講演録「詩人を天上から引きずり堕ろせ」(スタジオポエニクス)、評論に 2002(平成 14)年「肉体のアパリシオンーかたちになりきれぬものの出現と消失ー土方巽『病める舞姫』」(クレリエール出版)、2015(平成 27)年 10 月 1 日「舞踏、まさにそれゆえにー土方巽 曝かれる裏身体」(現代思潮新社)を発行。2018(平成 30)年 11 月 9 日「ひとりぽっちの戦争 日記1941ー1944 呉海軍工廠水雷部 河村正雄」(七月堂)、2020(令和 2)年 3 月 15 日「涅槃雪抄 歿後五十年三島由紀夫のことの葉の霊に献ぐ四句神歌」(七月堂)を発行。

「毛蟲の舞踏會」主宰で、写真、ドローイング、書、朗読、舞踏の演出等をしていた。

3、資料紹介

○『黒衣の旅人』

2006(平成 18)年 10 月 21 日

235mm×185mm

「永遠の/果実が/割れる/甘い/火の薫り/を放つ」で始まり、「黒衣のひとよ/アナタに/一茎の/パルムの菫/を、あげよう」で終わる、カリグラム形式の一千一行の詩である。清冽な光の言葉のイマージュは、詩の巡礼のようだ。